

Discussion Paper in Social Sciences

NO. 4. 2008/5/16

<聴声（ヒアリング・ヴォイシズ）>という
アプローチが紡ぎ出す世界
——インタビュー記録と若干の覚え書き——

interviewee 中恵 真理子
 樫田 美雄
 吉沢 毅
 山本 明子
 佐藤 和喜雄

The world led by ‘hearing voices’
—— The record of the interview and some notices ——

Interviewee NAKAE , Mariko
 KASHIDA ,Yoshio
 YOSHIZAWA, Tsuyoshi
 YAMAMOTO, Akiko
 SATO, Wakio

E-mail : nakaemrk@gmail.com (中恵 真理子)
kashida.yoshio@nifty.ne.jp (樫田 美雄)

目 次

紹介	1
まえがき	2
インタビュー録	
1) 一部	3
2) 二部	11
インタビューを終えての若干の覚え書き	22
引用・参考文献	23

【】は中恵の本文注記

被インタビュー者の紹介

吉沢 毅

映画『キチガイの一日』主演男優。こらーる岡山診療所作業委員。パステル作業所作業員。

山本 明子

映画『キチガイの一日』監督。2008年3月『デッサン』の監督でもある。こらーる診療所経理員。

佐藤 和喜雄

ヒアリング・ヴォイシズ研究会代表。NPO 法人福祉会菩提樹理事長。日本臨床心理学会運営委員長。

＜聴声（ヒアリング・ヴォイシズ）＞ というアプローチが紡ぎ出す世界
——インタビュー記録と若干の覚え書き——

中恵 真理子¹

樫田 美雄²

吉沢 毅³

山本 明子⁴

佐藤 和喜雄⁵

まえがき

このインタビューは、2007年12月14日、徳島大学総合科学部の第二会議室において、午前9時40分から約80分間でなされたインタビュー録である。

このインタビューの目的は、ヒアリング・ヴォイシズに関わりの深い三人に語ってもらうことで、ヒアリング・ヴォイシズとはどのような意味をもつものなのか、さらにヒアリング・ヴォイシズが開いてきた認識を通して、他の障害一般がもつ意味についても、一つの見通しが提示できるのではないかというものである。

ヒアリング・ヴォイシズ（＝聴声）は、音源が分からないのに、音や声が聞こえる現象を指す。聴声は社会の医療化のなかで幻聴という名の症状として取り出されたのであり、本質的に障害というものではない。とはいいつつも多くは人生の過程の苦難によって引き起こされ、生活に支障をきたすことが多いことから、障害といえないこともない。そして医療の世界では伝統的に薬で抑えることによって対処してきたものを、ヒアリング・ヴォイシズでは、積極的に体験を重視し、それが自己と自己を取り巻く他者との関係のなかでもつ意味を探求することで、生をプラスに転じていこうとする。こうした聴声という現象のゆえに見いだされる発想は、生まれもってあるいは人生の途上でひきうけることになる他の障害についても、積極的に意味を見だし乗り越えていこうとする流れにとって模範的類型を示しているといえるのではないだろうか。

インタビューの大枠は二部からなる。前半は、聴声という現象を様々な視点から語っている。これは「臨床心理学研究」で現在までになされた聴声事象に関する議論に沿うものであり、研究資料としても読めるようになっている。後半は三者の聴声体験とそれがもつ意味を語ったものであり、究極的には聴声文化というものを展開している。

¹ 中恵 真理子 徳島大学総合科学部 (E-mail: nakaemrk@gmail.com)

² 樫田 美雄 徳島大学総合科学部社会科学講座＝社会学
(E-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp)

³ 吉沢 毅 こらーる岡山診療所作業員

⁴ 山本 明子 こらーる岡山診療所経理員 (E-mail: shinya99@do4.enjoy.ne.jp)

⁵ 佐藤 和喜雄 NPO法人福祉会菩提樹理事長、ヒアリング・ヴォイシズ研究会代表

インタビュー録

1) 一部

中恵 おはようございます。

佐藤、山本 おはようございます。

中恵 徳島大学の中恵 真理子といます。現在私は、文化の森スクール⁶という徳島の塾で、講師をしています。それで朝の空いている時間、勤務前にですね、科目等履修生で大学院の授業と学部の授業を取って、勉強を続けているような者です。じゃ、あの、佐藤先生お願いできますか。

佐藤 佐藤 和喜雄です。この中で、一番年上だろうと思います。現在、仕事としては、精神障害の人達の地域活動を支援する地域活動支援センターを本業としておりまして、これは、NPO 法人福祉会菩提樹という組織を作って、その理事長をしております。そこには職員二人と利用者が 10 人ぐらい毎日通って活動しています。その他に、母校である金光学園中学・高等学校のスクールカウンセラーを、週に一回やっています。それから京都光華女子大学で精神保健福祉論と精神保健学の 2 教科を週に一回、担当しています。それが仕事面。それからヒアリング・ヴォイイズ研究会を 96 年に立ち上げ、その代表としての世話役を続けています。あと、日本臨床心理学会の、運営委員としてかれこれ何十年間、1973 年以来続けていて、ここ二年ぐらい、その運営委員長をやっていますね。金光教という宗教が創設 150 年くらいになるんですけど、私はその信徒であって、教師を補佐するというお役をいただいて、輔教というんですが、そういうこともさせてもらっています。そういう外のことをやっていると、家のことはさっぱりしないので、自家のことを、少しでもやるのも仕事のうちと考え、するように言い聞かせております。なかなかできないのですが。以上です。

中恵 ありがとうございます。ではそうでしたらですね、あのう、吉沢さんをお願いしたいのですけれども、よろしく願いいたします。

吉沢 吉沢といます。あの仕事は、こら一岡山診療所のお手伝いということですが、カルテ運びをしているのですが、ま、あの、患者さんを診療室までご案内するという仕事と、パステル作業所という作業所に牛乳の配達をしています。それが主な仕事。

中恵 映画は、の方は本業ではないのですか。

吉沢 あー（笑）それはもう、本業、本業ではないです。

中恵 それから、今回の徳島大学の授業の催し⁷にいらっしやっただけだったのも、こうい

⁶ 中恵は 2008 年 3 月 31 日で文化の森スクールを退職

⁷ この日 2007 年 12 月 14 日、12 時 30 分～14 時 20 分にかけて、徳島大学総合科学部人間社会学科共通専門科目『現代社会の諸問題：規範と逸脱』と榎田研究室の共同企画で、公開講座、精神障害当事者主演映画『キチガイの一日』の上映&『ヒアリング・ヴォイイズ講演会』が、開催された。インタビューはこの公開講座に先立って、行われた。

う講演の演者というのも、お仕事の中心ではないのでしょうか。

吉沢 えー、はい、スピーカーズビューロー岡山というのがありまして、そのなかで、しゃべれる範囲でしゃべらせていただく、ということがあります。で、まあ、この頃はあまりちゃんとした話が出来ないので、なるべく受けないように（笑）。あ、交流会とか、そういうのは参加していこうかなと思っています。

中恵 でも、昨日もジョークをいっぱい飛ばしてくださったのですが。

吉沢 （笑）あー、ああいうくだらない受け答えは好きな方ですから。まとまった話をしろというのは、出来ないんですね。質問は短めにさせていただいて、それに答えるという形でやっていただければなという。

中恵 はい、わかりました。ではですね、山本さん、お願いします。

山本 はい。山本明子といいます。今日は岡山市からきました。私は吉沢さんと同じくこちら一岡山診療所で、会計とか経理とか事務員の仕事をしています。それで今回映画を撮ったのですが、映画はうちに通院されている吉沢さんに声をかけて、初めてドキュメンタリータッチの映画を撮りました。

中恵 えーとですね、ちょっと変な質問になるかもしれないのですが、あのお仕事です。お仕事が会計事務ということと、それからいきなり映画を撮ることには、飛躍があると思うのですが（笑）。

山本 ああー。

中恵 これは、どうなんですか（笑）。飛躍はなく。

山本 ちょちょっと。

中恵 もともと英語、英語じゃなくて映画が趣味。

山本 （笑）映画が趣味じゃなかったのですが、それでは手短にお話しします。あのマイケル・ムーアの華氏 911 という映画があって、多分、私なりに面白かったんですね。ロードショーをやっていたので、そのマイケル・ムーアのお部屋というか掲示板に、華氏 911 は、イラク戦争に関わる戦争映画だということを見たのですが、日本の広島・長崎問題にもちょっと言及していて、マイケル・ムーアさんが撮ったら、広島・長崎もすごい反戦映画が出来るはずだから、マイケルさんに撮ってもらえみたいな。それで、私自身が長崎県出身だったので、すごく、こう、おかしいなと思って。日本人がやる仕事をなぜ外国人に頼まないといけないんだ、みたいな。そういう思いがあって、何かちょっぴりムカムカしてきたというか（笑）。憤慨してきて。それでそういううちに、何か突然ですが、あ、お告げみたいなのがあって。映画を撮れと。それで（笑）、ちょうどそのとき、吉沢さんが、ちょっとテンションが高くって、もう歌ったりダンスをしたり、あ、お元気だったんです。それで、そういうのも記録に収めさせてもらいたいなと思って。吉沢さんをお願いしたら快諾してくださって。「映画にしてもいいよ」と言われて、それから映画作りを始めました。

中恵 ありがとうございます。皆様、本当に多岐にわたるご活躍ということで。いま、三

人の皆様に自己紹介していただいたのですが、聴声ということと、精神障害についての取り組みに従事されているということですね。今日は、一番中心的なところでは、吉沢さんはもとより、山本さんからいただいた手紙ですとか、佐藤先生の臨床心理学会での研究報告ですとかを読みまして、実は三人の皆様全員に、聴声体験がおありだということに気づきまして、ぜひそこらへんのことをお聞きしたいと思っております。

それではじめに、佐藤先生、聴声というものがどういうことなのか、ご説明いただけますでしょうか。

佐藤 はい。聴声という言葉は日本にはなかったもので、これは、音源が分からなくても、声や音が聞こえる体験現象を、ヒアリング・ヴォイシズという英語で表すようになっていまして、それを、カタカナで「ヒアリング・ヴォイシズ」と言ったり、「声が聞こえる」と称したり、あるいは短く言いたいときは、「聴声」という言葉を作りました。そのような体験や現象は、従来、精神医学のなかで幻聴と言われていたことと重なります。一般的にはそういう場合、幻聴という風に、ほとんどの人が言っているようです。そのことをね、幻聴という精神医学的に症状という点からだけ見るんじゃなくて、声が聞こえているという体験そのものをクローズアップする、そこに理解しアプローチするという態度と方法をもってヒアリング・ヴォイシズと言っているわけです。ヒアリング・ヴォイシズは、そのような声を聞こえるという体験を言う場合と、そのような方法と態度をもって、アプローチをする研究とエンパワーメントの運動を指す場合と両方あります。

中恵 それはこういうふうな理解でも構わないのでしょうか。ヒアリング・ヴォイシズについての理解なのですが。

佐藤 はい。

中恵 普通は医療的に幻聴として捉えられていた、医療の対象とされていたものというのを、体験そのものに重点をおいて、そこから行動をおこしていく。

佐藤 ふうん。そうですね。

中恵 はい。

佐藤 「普通は」って言うときにね、近代精神医学が一般的に広がってから、そういうものが幻聴症状だということになったのであって、昔から人は、人がいなくても声が聞こえる体験をしてたんですね。現在でも声が聞こえて非常に生活をかきまわされて困ったり、周りの人がびっくりした場合に精神科医のところにかけるのであって、そうでなければ、聞こえるにしても、「ああ、聞こえるな」ということで、自分なりに対応していくということがあるんですね。

そういうものをひっくるめてヒアリング・ヴォイシズというふうにつけるようにしています。声が聞こえて困る場合に、一般的には精神医療の対象というふうに使われていきます。【ヒアリング・ヴォイシズでは】体験を大事にして、声が聞こえるからって慌てふためかないで、どんな体験なのかなということ、本人も落ち着いて対応できるよう

に、そして周りの人も「あっ、こういう声が聞こえるんですか。どんなんですか」というふうに、体験に焦点を当てて一緒に理解し、困る場合にはどう対応していったらいいのかということ、探索していくことが出来るということが、分かってきた。そこからまた、普段にはあまり経験しなかったこと、あるいは誰でもは体験していないという体験も、そのような構えでみていくと、その人の生活状況、社会状況それから人生にとって、何か意味があるんじゃないか。声から教えられることとか、そういったことも含めて、人生を再構築していけるきっかけになるんじゃないか。声から教えられることとか、そういったことも含めて、人生を再構築していけるきっかけになるんじゃないか、というところまで、ヒアリング・ヴォイシズは射程に入れて、研究し探求し、実践をしていくところです。

だから中恵さんがおっしゃったのが、普通は病気とされるけれど、体験に焦点をあわせて理解するっていう、そこは確かに大事なんだけど、それだけじゃないっていうことなんです。

中恵 はい、分かりました。ええと、あのう先ほど私がちょっといいかけたのはですね、あのう、結局そのう医療の取り組みの中で、聴声排除という事態があったということというの（佐藤〔2003：24-35〕）

佐藤 現在でもある

中恵 そうですね、で、あのう

佐藤 聴声排除というか、聴声、聞こえることを

中恵 ないものとするような、抑え

佐藤 聞こえないように

中恵 薬で抑えたり

佐藤 はいはい

中恵 聴声の話、あえて聴かないようにするっていうようなことをするってことですね。

佐藤 そうですね。それはね、今日の講演で最初にクリアにしようと思うんですけど、近代精神医学では、そのような体験は病的なものだと考えていて、根拠は分からないけど症状だとする、出来るだけそれをなくするほうが、本人も周りも楽だろうと考えて、お薬がある場合には効くだらうということで、薬で対応する。それが普通になってきている。

ドクターとの良い関係があつて、良いタイミングでお薬が与えられると、疲れたり過敏になったりしていることもありますから、ストーンと声が消える場合もあるようです。で、薬になる。その方が楽だという方も当然あるのですが、なかなか声はそういうにいかない場合もたくさんあつて、お薬を飲んで声をとまったけど、また出てくる。その声自分が自分を悩ませ、生活をかきみだすというふうな体験があると、お薬をもっと増やしてみようということになる。そうすると、活力とかはつきりした気持ちとか元気がかが抑

えられて、なかなか生活がしにくくなる。

中恵 はあ、はい。

佐藤 そういうことがつらいのと声が聞こえて生活がかき乱される。医者にかかっても治らないということで、非常に自分を駄目な人間みたいに思ってしまう。周りの人も、声が聞こえている、病気が治ってないからいろんなことが出来ないんじゃないかと思いついて、そういう二次的な負担も大きくなっていく。そういうことがね、伝統的な精神医療では解決されていない問題だと思います。

中恵 はい。

佐藤 それからそういうふうに幻聴、つまりありもしない声が病気の症状のために聞こえるんだという考え方が固いもんだから、幻聴のことを、どんな声が聞こえるのか、どんなふうに言っているのか、いろいろ詳しく聞くと、その人の非現実の世界に、余計入らせてしまうんじゃないかというふうに、心配してですね、精神科医達は、幻聴を探るためにはいろいろと問診をするんですけど、これは幻聴だと判断すると、それ以上、例えば女の人の声なのか、優しい声なのか、怖い声なのかとか、どんなことを言うてくるのかというようなことを、あまり興味をもって聞いてくれない。その人が内的世界では非常に大きく占めている体験なんだけど、あまり聞いてくれない。あまり掘り葉掘り聞かないほうが無難だと考え、それは医学教育や看護教育においてもなされているのが、一般的なようですね。それに対して、例えば病気としても、自分が対応していくんだから、その対処を助けるためには、もっと関心を向けた方がいいという考え方も医療の中に入ってきてはいます。

それはヒアリング・ヴォイシズとちょっと違うけれども、無視するよりは、体験そのものに自分がどう対応していくかについて、医療や看護福祉等々の援助者も関心を向ける、それが「対処」という言葉で呼ばれて、一部では探求されています。

中恵 はい。するとあの先生が先ほどおっしゃった取り組みと言いますのは、あの体験ということを重視して、その体験を他者に開いて他者に理解してもらおう。で、そのなかで新しい関係を作っていくって、体験をないことにして関係を作るんじゃない。体験があってそういう状況を受け入れて関係を再構築していくってことの中に、新しいそのう。

佐藤 「あってなくて」というのは他者への話をする関係？

中恵 そう、そうです。はい。例えばべてるのいえとかではですね、そのう関係がこう改善していくことによって、幻聴の質自体も変わっていくってようなことも（浦河べてるの家 [2002 : 98-104]）

佐藤 うん。

中恵 実際あるってようなことを、本で読んでみたことがあるんですけど

佐藤 ああ。

中恵 あのう吉沢さんはいかがですか。当初幻聴が聞こえてきて、今このような取り組み

をされていて、幻聴自身の変化とかっていうのはあったんでしょうか。あの例えばこら一るに来てからですとか。

吉沢 あの発病時はコントロールされて、声にコントロールされて、してる行為は自覚を、これをやってるなっていう自覚はもっていたんですけど、あの制御がきかない、自分で自分がコントロール出来ないっていう状態にあったんですね。それがまあまああのう、声が聞こえるって嫌なんだけれども、あんまり生活に支障はきたさなくなっただけでも、その僕の場合は、一言二言で十分存在感を、その声をがいせんインベーターと呼ぶんですが、その存在をアピールすることは出来る、あのいつ発病時になるかわからないというところへ行くんですね。

佐藤 行くっていうのは、声からの一言二言でもって、その存在が吉沢さんの方にアピールされるって。

吉沢 そうですね。といいますか、いつ発病時に戻るか分からないんだぞということが、一日のうちでもちょっと出ると、声消えてももう、これ以上またなるなというのは残ると思うんですけど、今のところは毎日声があって、毎日確認されているっていう。

中恵 ふうん。

吉沢 それで昨日も、ちょっと酒の席だったのですが、それも吉沢なんだろうという。それを取り除いた部分が吉沢という言い方はちょっと違って、声が聞こえている吉沢をひっくるめて吉沢なんだなという、都合の悪いところだけ、私じゃないと言うのは、ちょっと適当ではないかなっていうのを、そういう想いで。

中恵 というのを聞きすると、その声というのを例えば外部からの声だとか自分の内的な声であるとかいろんな捉え方があると思うんですけど、吉沢さんはそれを自分の内的な声として聞かれてる？

吉沢 あっ、両方あります。外から聞こえてくるのもありますし、頭の中でそのう自分が想像しなかった言葉がこう浮かんできたりする。そういうのがインベーターかなという思いがしてたんですけど、そこはもう精神医療では、解決できない問題で。

どう付き合っていくのかっていうそこで、ヒアリング・ヴォイシズのような考え方をすると楽になるというようなことで。実際に聞こえているんです。で、あの、そういう考え方です。

中恵 あのヒアリング・ヴォイシズのような考え方とおっしゃてくださったのですが、それはどういう、先ほどおっしゃてくださったようなことなのか。

佐藤 そうですね。ヒアリング・ヴォイシズの考えに触れて、これを開始したオランダの社会精神医学者のマリウス・ロウムさんと、それから一緒に探求してきたパッチ・ハーグさんという声の聞こえる人ですね、その人達の取り組みが論文になったんです。論文そのものはロウムさんと精神保健福祉センターに勤めていたサンドラ・エッシャーさんというサイエンティフィック・ジャーナリストという立場の人とで書かれたものでした。その論文を私が訳して『臨床心理学研究』に載せてもらったあと、しばらくしてから広

めたいと思って、抜き刷り冊子を作ってね、岡山で私が生活するようになって、岡山で関係者のところに持って行って、それで一緒に勉強しようと呼びかけをしたんですね。1996年に最初にそういうふうにミーティングをしようとしたときに、吉沢さんがそのメッセージをどっかからもらってきて、関心をもって参加された。

中恵 ああ。

佐藤 精神保健福祉センターの先生なんかから、おそらくそちらに届いたんだと思う。体験者として参加されてですね、そこから一緒にヒアリング・ヴォイシズのことを、私は体験者から学んで、彼は私のやろうとしているヒアリング・ヴォイシズのことを取り入れながら、やってきたところがあります。

その結果の一つですが、共同でワークショップを運営したこともあります⁸。

中恵 はい。ああ、そうやって関係が築かれていくっていう。

佐藤 そうですね。関係がね。声が聞こえているあなたはその体験のスペシャリストという捉え方をしているんですね。一般的には職業的な技能者をスペシャリスト、専門家とってますけど、体験のスペシャリストはあなたです。同じように聞こえてても、他の人の体験はその人が最も良く体験しているスペシャリストです。そのスペシャリストが1人だけでは対応できないとき、1人で対応していろんなことをやっている人もいますけど、かきまわされてね、苦しい人もたくさんいる。で、そのスペシャリストと援助したいスペシャリストとが対等なパートナーシップを持ちながら、共同研究をしていこう、共同の研究をしていこうとする。これはね、オランダのロウムさん達から世界に広まって、みんながそうだそうだといって、やってきている態度なんですね。

中恵 はい。

吉沢 いたこ。ちょっと聞こえてても、そのう生活に支障がない人。これは病気のうちに入らないんですよ。いたこさんなんか、まさに声が聞こえて利益を得ているという。で、生活するには支障がないどころか得をしているみたいな。いつでも声をコントロール、コントロールというか、自分で聞きたくないときには聞かないですむ。

あのう町の御祓い屋さんとかっていう人達は、自分が何かの問題について知りたいときに、宗教的なことで声を聞いて、自分の声で説明するというようなことをするんだけど、それは自分で聞きたくないときは、もうそこんところは触れないで生活できる人達。

佐藤 さっき山本さんが映画を撮るきっかけになった声の体験というのを言われたけど、そういうこともそれを受け入れてね、映画を撮るという生活を築いていかれたんですね。導かれたように。

山本 そうですね。

佐藤 ですね。そういうことがいろいろあるんだけどね、ヒアリング・ヴォイシズでは、もっといろんな聞き方をするんですね。精神医療のところでは、声によって飛び降りるとか、死ぬ目にあうとか、苦しい人達の話がよくあるので、多くの精神科医達は、

⁸ 『臨床心理学研究』38(4)に報告されている(佐藤 [2001: 59-71])。

声というのはたいへん困らせる症状だという認識の方が普通なんです。ロウムさん達は取り組みのなかで、声に大変困らされていた女性の患者さんと一緒に、人気のあったオランダテレビのトークショーに出て、「このような声を巡ってどうしたらいいんだろう」というようなことを呼びかけてですね、「こういう体験をしている人はどうか私の呼びかけに反応してほしい」と話した。これをテレビ局と共同でやったものですから、広い社会のなかから反応が出てきたんです。そのなかには、「声が聞こえるけど精神科医に行ったことがないんですよ」という人もたくさんあることが分かって、驚いたんですね。ヒアリング・ヴォイシズはそれ以来、自分でなんとかしている人達の体験も大いに取り入れて、それを含めてね、この現象について探求していこう、それはまた声にかき回されて精神医療を受けている人達にとっても大変役に立つ、というようなことが分かってきたんですね。

ロウムさん達は、そういう声が聞こえること自体が精神障害の指標になると考えるのは間違いであると、声が聞こえて大変自分の気持ちや生活がかき回されて困っている場合にだけ、病気と考えてもいいだろうと。だけどその場合にも、声に対してちゃんと対応するという道も勿論探していけるし、それからもともと精神科医に行かなくて、自分なりの対応を探求していった人もいますね。そういう人達を病気と考える必要は全くない。そういう考え方を出してきてですね。

声によって何か指示されたり導かれたりという平凡な人達にもあるんですが、あるいは非常に大事な例えば宗教の創設に導かれていったような場合にもね、そのような体験も含めて、ヒアリング・ヴォイシズは勉強していくべきだと考えているんですね。

中恵 ああ。確かあのロウム先生【エンシンクの間違い】の論文の中で、歴史的に、ええと有名な学者とか（エンシンク [1997 : 2-29]）。

佐藤 あっ、それはね、ソクラテスが重要な決定をするときに、自分の聞こえてくる声に従って決定をしていたということが、文献的にもあります。私は直接調べてないけれども、そういうことは歴史的にたくさんある。

中恵 そうですか。それから歴史の揺籃期というのですか。には、もう大概の人が自分の知識というものを、亡くなった父からの声みたいな感じで聞いていたってような。だからもう聴声が普通、それが普通の生のあり方みたいなものも、何かの文献で読みました（エンシンク [1997 : 2-29]）。

佐藤 うん。それはオランダのロウムさんが、一緒に、初めは診療していたパッチ・ハーグさんなんですよ。アメリカの心理学者ジュリアン・ジェインズという人の書いた、日本語で言うと『二相の心理の挫折における意識の起源』という本があるんですよ。これは1976年というそんなに古くない本ですけど、その著者は、紀元前1300年頃までは、ものごとを決定するときに、声を聞いてそれに従ったり参考にしたりするということが、意志決定の方法として、その頃までの普通の方法だったという、論述をしている。ジェインズによると、そういう聴声の現象は、その後一般的ではなく消滅していった、

我々が現在意識と呼ぶものにとって代わられたんであろうと、そういう説を立てている。
中恵 つまり社会的な関係の変化みたいなものが、そういう聴声体験というものとも結びついていってるという。

佐藤 そうですね。そういう論述をね、患者としてロウムさんところへ来ていたパッチさんが読んで非常に感銘を受け、そのことをロウムさんにも話したということです。

2) 二部

中恵 ここら辺で、聴声というものについていろんな考え方や取り組みがあることが理解できたかと思います。それでは、三人の皆様にも、冒頭私がお聞きしたいとお願いしていたことに移ろうかと思えます。実際に聴声体験を経て、例えば生活に対する示唆・インスピレーション・導き、いろんな観点からですね、お話をお願いします。

では、山本さんからお願いします。

山本 はい。

中恵 お告げから映画を撮ったということ、ここら辺の体験のことを(笑)

山本 そうですね。

中恵 詳しくお聞きしたいんですが。

山本 私は、こら一岡山診療所に勤めていまして、仕事上、患者さんのカルテを見ることがあるんですね。ときどきこう、南南西から声が聞こえるとか、胸の底から声が聞こえるっていうのが、書いてあって、お告げ体験がなかったときは、そんなことがあるんだぐらいしか、自分に重ね合わせて考えることは、勿論、出来なかったし、ただふうんというふうな、聞き流す状況だったんですよ。それで、ま、そういうことが世の中にはあるんだみたいに、頭にありました。それで自分が、それをお告げというかどうかは分からないんですけど、私の場合は、ま、「映画を撮れ」ということなんですけど、胸の底ぐらいから、声としてこう聞こえるっていうかね、鼓膜にあたって声になるんじゃないって、あのう、なんていうかな、体で感じるっていうような。

中恵 うーん。ああ。

山本 それで映画を

中恵 はい。

山本 あのう、撮れっていう、所謂こう命令口調だったんで、それでちょうど私は多分、あのう怒って興奮状態だったんで、そういうことが起こったのかもしれないんですけど、それもその声を聞いて、声っていうか体で体感しているときに、すごくこう、神様っていうかハーブの音が聞こえて、柔らかい光がぱーって雲から射すみたいな、そういうこうナチュラルハイ状態みたいな感じだったんですよ。

中恵 はい。

山本 でもそのときにはお告げ体験というのではなく、世の中にあってそれで凄くお金儲

けしたりとか、インチキだったり詐欺だったりとか、テレビでそういうことは商品化されていたんで、気持ちよくなったのに、なんかそのう、私がペテン師みたいな気持ちになって、今度は地獄に突き落とされるみたいな、凄い短い間に、天国から地獄へ、こうした落差が初めての体験でした。

で、あまり上手に言えないんですけど、あっこれが世の中でいうお告げというものじゃないかと解釈したんです。これがお告げと入ってきたんじゃなく、私が知っている患者さんから聞く幻聴とかが、わりとこうマイナス的なことを言うというのを聞いていたので、これはお告げだなと思いました。あとは、それが命令口調だというだけでなく、それを自分が絶対やらなくちゃいけないんだというふうに、なんかこう心底やるしかないとか、やらないことを選ぶ気持ちがぜんぜんない、やるしかない。それでまた困ったんですよ。私は映画の機材がないし、何にもあのを(笑)、持っていないのにどうしたらいいんだろうと、何でそんなことを私が言われなくちゃいけないんだみたいな、でもやれと言ってるからにはやるしかないとか、そこにもう立たされたという。

中恵 で、実際に行動をとっていかれて、そんな機材も集めて

山本 いいえ、職場の人に借りて

中恵 で、映画を撮って

山本 はい。

中恵 で、映画祭にも出品されるというところまで

山本 そうですね。ええ。せっかくなんで自主上映して、自主上映したら映画の市民でやっている人が、「じゃあ僕のところの映画祭にも出してみたら」とか、その人も、「山形ドキュメンタリーにも出してみたら」とか、いろいろ言われて。

中恵 はい。

山本 映画祭に出したり、それに懲りずにまた映画を作ったり。

なんかそのだから、お告げによって、自分も分からないんですけど、私の予測では、使ったことのない脳とかその部分が使われて、その辺からちょっとこう活性化して、あまり才能があるとは思いませんけど、そういう気持ちにさせられたっていうか。そういう要因になったかもしれないかなって思ってます。

中恵 お聞きしながら、あのを使命がふつてくるときって、ああいう感じだろうと思ったりするのですが。

佐藤 うーん。そうね、使命ね。声ではなくてね、なんか使命感とかね、ふと想いがはっきりして迷いなくね、進めるというときがあります。

中恵 はい。

佐藤 まあ、似ているかなと思います。ただちょっと違うところは、自分でああ使命だなあと思えるときと、声がかくるときは、どっから来たんだろうみたいに、ちょっと予想外のところからこうパッと来て、それでびっくりしながらもそれを受け入れていくプロセス。

中恵 はい。

佐藤 まあ、うん、ちょっと違うっていう。

中恵 はあ、はい。

佐藤 けれど、素敵な体験の一つですね。

中恵 ありがとうございます。ちょっとまとめ方が不十分で。書くときにもう一度考えます。ちょっと、今感動だけで終わってて、すみません。

佐藤 それが大事です。

中恵 それでは吉沢さん、聴声体験と今の活動と結びつけて、何かありませんか。

吉沢 これから声が消えるだろうという希望は全くないんですよ。これから死ぬまで続くんだろうという。自分があのうものを言うってことが、自分にとって声が聞こえるきっかけでもあったわけで。だからお前が生きていける生活範囲というか、何のために生まれてきたのかというようなところへいくとですね、その声が聞こえてきて。今の精神医療ではどうにもならない。しかしその精神医療の範疇、今のところ精神医療の範疇でしかないことを、僕がしゃべることによって、あのうしゃべることが面白くはないかという。そういうふうに思えるときがある。そういうことが重なって、自分をさらけ出すなかで、さらけ出してなおかつ、人権が欲しいとこで、映画とか講演なんかもあるんですよ。そういうところでしゃべることが僕の使命みたいな。大きいことを言えばそういうふうなんかという。声の意味を考えるとそうなるのかな。

中恵 ふうん。ああ、はい。じゃあやはりその声と自分と。私、先生、ロールプレイの報告（藤本〔2002：17-21〕）を読んで、その声と私と話をしている。普通は自分と他者との二者関係のなかで会話とかコミュニケーションされているのが、自分が一人にいるときにも自分と声との内的なつながり、コミュニケーションがある。それがここに三人いたときに【中恵、他者例えば佐藤、声】、私が何かしゃべろうとする、そのときにもし私に声が聞こえてくるとしたら、先生がおっしゃったことに私が反応することに対して、声がコメントする。じゃこの声と私とどう結びつけて先生に返すのが一番誠実なありかたなのか、そんなふうな状況に追い込まれるんだと思うんですよ。

だから、吉沢さんのお話を聞いていて、そういうふうな内的なやりとりをしながら、今の仕事を見つめて、自分の活動をされていっているんだということを、凄いと感じました。

佐藤 吉沢さんは、聴声をね、受け入れてね、受け入れるしかないと言っておられる。困らされることもいっぱいあるけれど、でもそれはずっとあるし、これからもあるだろうと。それに対する精神医療の取り扱い方は、非常に狭く薬物療法中心だし、助からんこともいっぱいある。吉沢さんは、最近では、精神医療だけで対応するにはあまりにも大きな、これが人間の生活の仕方の一つだからということで、そういう想いを持って、そこをね、自分は外に出てしゃべっていくことが、そういうものを狭く縛られることからお

りていくことになるんじゃないかというところまでね、なんていうのかな、生き方を見つけておられる。素晴らしいことだと思いますね。

中恵 では佐藤先生のご体験を。

佐藤 私の聴声の体験はね、若干ながらあるんですね。ヒアリング・ヴォイシズに出会ったのは、イギリスで1991年なんですけど、それより前から日本臨床心理学会が学問というものを、ほんとに苦しんでいる、精神的なものとかいろんなことで苦しんで、いろんな生活状況の中で苦しんでいる人と、対等な関係を結びながらじゃなくてね、精神医学も心理学も一方的に、生活状況に関わらないでね、平均的なものからはずれているじゃないかみたいなね、そういうものの見方、対象化してものを見て、それを管理する方向にいつてるんじゃないかという反省をし始めたのが、1968年、9年ぐらいなんですよ。

中恵 はい。

佐藤 私はそのころすでに卒業して仕事に就いていて、日本臨床心理学会のメンバーでもあったんです。そういうなかから、患者体験者、あるいは社会的に非常にマイノリティであり苦しい立場に置かれている人達から出てくるね、叫びとかですね、そういったものを一緒に社会が自分のこととして受け止めていかなかったら、この社会はやっぱり良くなれないんじゃないかということが、だんだん分かってきたんですね。そういう改革運動をやってきたんですね。

中恵 はい。

佐藤 そういうなかでは、患者さんと呼ばれる人は症状でもって、苦しい思いをしながら出していることを、病気の症状だから早く消した方が安全なんだというんじゃないくて、その苦しい症状というのは、なんかの叫びじゃないか、なんか普通の言葉で言えないことを表そうとしている意味があるんじゃないか、そういうものの見方が大事だってことはね、患者さんとの出逢いとか患者運動との出逢いの中で、お互いに分かるようになってきた。

あるいは学者達もそういうことを、究明しようという人が出てきたんですね。そういう状況の中で、私は、精神科の病院で入院治療を中心にするということが、非常に人間を狭めるということを、病院に勤務しながら、非常に残念に思って、地域で普通に生きていく方向を、探求しようとしてきた。

中恵 はい。

佐藤 そうい背景のなかで、いろんなことに出会って、いろんな規制のやり方に抵抗したり、うーん、まあ苦しい人達を地域で応援したりとかいう忙しい状況になりましてね。で、80年代ですか、ヒアリング・ヴォイシズを知らないときです。夕方お風呂に入っていたら、電話が鳴るんですね。

リーン、リーンと切れながら鳴りますよね。

中恵 はい。

佐藤 女房がいるはずなのに、誰もいないのかなと思って、お風呂の戸をちょっと開けて、耳を澄ませるとね、聞こえないんですよ。変だな、止まったのかなと思って、また体洗ってたら、また同じようにリーン、リーンと鳴るんです。

中恵 はい。

佐藤 で、また扉開けてみるとまた止まるんです。聞こえないんです。そういうのを二、三回やって、はたとそこで、あっ、これは電話が鳴ってるんじゃないかと、自分に電話が聞こえてるんだな、それが一般的にいう幻聴の一種だなあというふうに思って。で、体洗って、普通に風呂を出たんですね。それが聞こえた初めてですね。

中恵 はい。

佐藤 あっ電話だって、聞こえたとたんに思いましたね。人の声ではなかったけど、こういうのもね、精神医学では幻聴の一種だと、考えているんですよ。

すぐそこで思ったのは、これは何か自分に教えてくれたな、ということなんですね。

中恵 うーん。

佐藤 困ったなというよりも、ああこれは相当生活が忙しすぎて、無理をして、もう出来そうにないのにやらなきゃいけないと思って頑張りすぎて、家族もそのためにしんどい思いして、今の状況はその限界を超えつつある、そういうときにこの電話が聞こえたなと思って。

それからもう一つ、その当時、地域で退院した人達と、日常の生活を立て直す運動と一緒にやっててですね。忙しくなっていたんです。そうすると夜、ちょっとしんどくなって、佐藤さんどうこういって、電話をかけてくる人が仲間のなかに出てくるんです。

中恵 はい。

佐藤 夜遅くに電話かけられると、寝られなくなっちゃうから、十時半までにしてくれっていうふうに（笑）、みんなに言えるような率直な関係が出来てくるわけです。

「そんなに遅く電話かけられると、俺は死んじゃうから。駄目だよ」と言っていて、「分かった」と言いながら、十一時にかけてくる奴がいるんですね。

中恵、吉沢、山本 （笑）

佐藤 「十一時だ。三十分超えている」「うん、分かった。そうだけどう」とか言って、またしゃべるから、「んー、もういい加減にしろ」とか言って、「今晚は疲れているから、話出来ないよ」とか言って、やりとりするようになったときもあったんですね。

中恵 はい。

佐藤 だから電話が嫌になったんです(笑)。

中恵 はい(笑)。

山本 (笑)

佐藤 非常に嫌になってたんです。

山本 うんうん。

佐藤 もう電話さえなければと思ってたら、風呂に入っているときに電話が聞こえてくる

(笑)。幻聴というのは意地が悪い性質をもってるなと思ったんです。そう思いながら、あっ、「しなくちゃいけない」とあんまり頑張りすぎていたから、そうかもうちよっと整理しなさいということをお教えられたと思ってですね、それから早速に仲間と話してね。地域活動の仲間のなかで、時々ミーティングをするわけだけど、私が忙しすぎれば、今日は子守だとか今日は疲れているとか、そういうときはみんなですべて勝手にミーティングしてくれと、そういうことを言えるようになったんですね。それでそこを切り抜けたんです。

中恵 はい。

佐藤 その体験というのは、こういうふうに声が聞こえてくる場合に、その意味をちゃんとね受け取っていけば、あのお大事なメッセージとしてね、こちらは受け取れるんだなあということですね。これはヒアリング・ヴォイシズに出会う前なんですよ。

中恵 はい。

佐藤 それっきり電話の幻聴はなかったんですよ。

中恵 はい。

佐藤 そうしたら、イギリスに留学しているときに、ヒアリング・ヴォイシズの、オランダで始まったものが、初めてイギリスに上陸したときのカンファレンスに参加してですね、ああ、こういう考え方は大事だなあと、スーと入ってきて、これは自分のものにしていこうと思った。それから日本にも翻訳して紹介していこうというふうに、つながっていったんですね。

だから、ただヒアリング・ヴォイシズのロウムさんの話を紹介したっていうだけじゃなくて、そういう自分たちの専門的なものを、所謂患者さんとの関わり合いのなかで見直していくという運動の延長の上で捉えた。それから、自分が直接関わる生活が忙しくなりすぎて、まあ頑張りすぎたというときに、声が、つまり電話の音が聞こえてくるという、そういう体験があったからね。

中恵 そうですねえ。

佐藤 余計に

中恵 はい。

佐藤 もっと系統的に、声が聞こえる人達の体験をね、素直に聞いていこうと感じて、そういう考え方が素直に入ったんですね。

中恵 うーん。その道に進めと言わんばかりに、こう。

佐藤 ん(笑)

中恵、山本 (笑)

佐藤 そうですねえ。ヒアリング・ヴォイシズの初のロンドン集会に参加したときに、ロウム教授からね、「スキゾフレニア・ブレトゥン」という世界的に知られた精神医学雑誌に載った彼等の論文をもらったわけですよ。で、日本に帰ってきてまだ仕事がなかったから、その間に翻訳をして、『臨床心理学研究』に載せてもらったわけですよ。東京から郷里の岡山へ引越してきてね、食うや食わずの生活だったけど、少し落ち着いてから、そ

の翻訳を誰でも見れるようにね、安いパンフレットにして、配布していく。そのなかで吉沢さんに出会ったということです。

私の聴声体験はそれだけなんですけどね、毎日毎日朝から晩までね、苦しい声が聞こえてきて格闘しているたくさんの人のことを考えるとね、聴声者の端くれにも及ばない体験なんだけど、そのとき聞こえた「電話の音」の体験で、自分の生活を照らしてみると、生活が忙しすぎて限界を超えていることへの警告だと受け取れたことは、やっぱり良かったと思う。

中恵 はい。

佐藤 その後、聴声はないかいと聞かれたんですけど、岡山県で短大に勤務するようになってですね、あるとき午前中に病院に行っただけです。午後からの授業に行けると思って、病院に行ったら非常に込んでいてですね、長く待たされて、これでは授業に間に合わないのではないかな、そこからさらにまあ電車で三十分は乗らなきゃいけない。大変困りまして、いらいらしてですね。自分の名前を今か今かと呼ばれるのを待ってたんですね。そしたら行くべき診察室から看護婦さんがでてきて、「佐藤さん」と言われたんです。「えーそうですか」と問い返すと、「全然呼んでません」て。「あっそうですか」って。待合いの席に戻ってきて、『ははあ聞こえたな』と思いましてね。今日はもうどうにもならないくらいいらいらして、なんとかしてね、早く呼んでもらって治療を受けて授業に遅れたくないと、いらいらしながら考えていた時にね、こういう聴声でメッセージをもらったんだなあと思って、気持ちが少し楽になった。

中恵、山本、吉沢 (笑)

佐藤 こうなったらもういらいらしてもしょうがないと思って。そこで電話をかけてね。「いやあ病院が込んでいて」と病院のせいにしてね。「病院が込んでいるんで、授業に遅れる可能性が出てきたから、学生に伝えてくれ」といって、大学に電話かけておいて、で、なんとかしてもらった。

中恵 はあー、なんかそれねえ、声があつてほんとに救ってもらってますよね。

佐藤 そうですねえ。騙されたって思うよりも、ああ聞こえたんだなあというふうに分かって、自分がいかにね、出来ないことを何とかしようと思っていたか。

中恵 そう、どう対処すべきか

佐藤 自分が混乱していたことが分かったって。それでしかるべき手がうてた。

中恵 はい。

佐藤 まあそんなことがあつてね。最近は多分ないですけど。

中恵 じゃああまり混乱した状況がないんじゃないんですか。

佐藤 まあ混乱しよっちゃうしてますけど。なんとかサバイバルしてる。

あのね、声じゃないんだけど、大事な決断するときね、これはぜひということで、迷いなく決断できたということがあるんですね。

中恵 はい。

佐藤 これは九年ほど前に、郷里の金光町で作業所とかグループホームをね、作りたいという気持ちをもって、病院を辞めて留学もして、で、大学で教えて生活を立て直していた。その間に借りられる家とか探していたんです。そしたら売り家があったんですよ。町内のまちなかに。

道が狭い分、買い手があまりつかなかっただけで、大きな百坪の土地にね、古い家が建ってて、見たら使えそうだなあと。そこで値段を聞いたら、こうこうで。そのときにああいいなあと思ってですね、買ってなんとかしたいと思って、女房に相談したら、「ああ、いい家だね」って。で、今手持ちに残ってるお金がいくらで、ローン払ってるのがこれだけでっていうふうに、いろいろ計算し始めてね、女房が。いやそんな今まだ岡山に引っ越しして家建てた後でまだローンが、そんな無理でしょう、などとは一言も言わないで、「これだけしかないけど、どうやって借りられるだろうか」みたいなことを言い出してくれたんで、非常にサポートされて。もうとりあえず買う方向で、借金の方法を一生懸命組み立てて。ローンがあったもんだから、なかなか借りられなかったんですけど、いろいろ工面して、お金を借りてですね、それで買い取ったんです。それ以来そこを作業所にするということで、今九年目なんですけど、そのときの気持ちっていうのは、大変お金のこと返せるかとかね、年はもう六十だったし、大変だったっていうのはあったんですけど、迷いがなかったんですね。

中恵 うーん、うん。

佐藤 それでねえ、なんか導かれてみたい。気持ちが今でもありますよね。

中恵 そうですねえ。

佐藤 それは私が信仰のうえで、こういうことしたいということのを思いながら、自分だけでなくで願うということも祈るということも、それに伴ってるんです。祈り、願い、努力する。そういうなかでね、出逢いが出てくる。あっ、導いてくださったなあという感覚があるんですよ。

中恵 ああ、はい。

佐藤 これって声じゃないけど、スーと、大変困難な、リスクもあることをね、こう思いきって決断させてくれたし、女房が反対しないで助けてくれたって、ありがたいな。そういう思いがありますね。

中恵 はあ、今のお話は聴声という言葉は出てこなかったんですけども、そのう広く虫の知らせという言葉がありますよね。それをふまえれば、いろんな出来事を考えたとき、聴声というのは誰にでも起こりえる体験であること。そして近代社会になって区分されるようになったっていう。やはりそれが自分の身に起こり得るということは、何かのメッセージであるということ、言えるだろうなあ。本来はそのメッセージがプラスのものであれ、マイナスのものであれ、それをくみ取って生きていくことが、大事ななあと思うんですけど。

佐藤 そういう理解をしていただけると大変心強いですね。私の電話の体験にしても、私

の解釈は、メッセージがどこから来るかということに関しては、状況とね、自分がこうしたいとかこうしたいのにもううまく出来ないという葛藤を含めて、ある程度続いていた状況と自分の願いと想いと相互関係。そのなかでね聴声が生じると最近解釈してますね。それは悪いときには自分を責めるような場合も含めてね、やっぱり一方だけじゃないだろうと。外部に何か自分と関係ない根本的に嫌なこと、という外部の状況というのは、自分も加わっているし、なおかつ、自分でどうにもならない状況がありますよね。そういうものの相互関係の中で気がつかないうちに醸成されたようなもの、というふうな解釈を私はしている。

中恵 ふううん。はい。

佐藤 その解釈はそれぞれね、その状況における解釈を尊重するというヒアリング・ヴォイシズのフィロソフィーです。

中恵 あのうそれではもうそろそろ時間ですので、ここらへんで終わりにしようかと思えます。あの皆さんそれぞれに、あの最後の締めと言いますかご挨拶をしていただいて、終わりにしようかと思うんですけども、あの吉沢さんトップ・バッターでお願いできますか。

吉沢 何を言えばいいですか。

中恵 そうですね。今日のインタビュー全体でも結構ですし、あのヒアリング・ヴォイシズのことでもいいですし、これからの夢とかで結構ですし。

吉沢 たかだか二十年かそれぐらいで、あのう人生終わるかなあというか。それでその二十年をどう使おうかというところで、自分の体験を話すということが続けていってですね、町の中でどういう名前になるか分からないけれども、市民権を得てですね、そういう人が変わっていると思われても、地域で生活が出来るようになったらいいなという想いがある。で、すごく弱いからあの自分が意志が弱いから、そういうふうになるのかと言われると、ちょっと困るんですけど、今はそう思ってます。マイノリティの人がどれくらい食い込めるかによって、市民権を得て、病人も含めて、市民権を得るといって、そこんところに至りたいという想いをもつことは、つまりは今のところは自分の体験をしゃべることで、今、止まっています。

中恵 ありがとうございます。これからの取り組みもぜひ教えてください。これからもよろしく願いいたします。

あのうそうしましたら山本さん。

山本 あのう、私は先ほどちょっとお話ししたお告げを受けたみたいなどころがあるので、その自分の体験を、映画にね、したいと思っています。で、ちょっと後付になるんですけど、うちの母が言ったのですが、あなたのお爺ちゃんのお爺ちゃんは山伏だったって。はっきりとは分からないんですけど、千里眼があったりとか遠くに川向こうに歩いている人達のいたずらか何か判らないんですけどね、提灯の火を消せたとか、いろんな話が

あったりして。物語風に自分のお告げの体験と混ぜて。それとやっぱり今の世の中では、お告げというところちょっと怪しいとか人に言いにくいとかその体験を受けて、これを言うとな変な人に思われるんじゃないかみたいなどで、夫にも言えないなあと思った時期もあったりして。でもそれは言えたんですけど、そのへんの葛藤とかが、お告げが初めてあったりすると、凄くショッキングだと思うんですよ。そのへんをこう楽しく映画的に描けたらいいなあというので。第三作目をシャーマンというタイトルで、シナリオも書いてないのですが作りたいと思ってて。それを作るのが夢です。

中恵 よろしくお願ひします。またぜひお願ひします。

佐藤先生、よろしくお願ひします。

佐藤 先ほど中恵さんがまとめられたときにね、声が聞こえる体験を症状としてやはり消した方がいいこととか、人に言ったら理解されないし隠すということから、人に安心してちゃんと話せるという関係が出来たら、その関係が出来ていくなかで、両方の人、話した人も聞く人も意識が変わってくるというふうに、整理されたと思うんですけどね。その時はもう一つ、話した側自身も、声と自分の関係がしっかり生きていく。それを押さえていきたい。人との関係だけでなく。

中恵 声と自分との関係。

佐藤 自分の声であるから、その体験というのは、山本さんがおっしゃたようにとまどってる自分もあるわけですね。あるいは人との関係で言えばおかしい人かというような偏見によって二次的に起きるとまどいもある。それを安心して話せる関係を作っていくたりする。自分と声との関係をもっとゆとりをもってみる事が出来る。声のこともみれる。自分のこともみれるような、そういうことを今後、ヒアリング・ヴォイシズのことをですね、深めたり広めたりしていくなかで、鍛えていきたいと思ひますね。

中恵 はい。

佐藤 こういうことに出会ったことによつて、私自身がどう生きるのかっていうことを、それから自分の仲間がやっぱりともに生きる世界であつてほしいという願ひを考えているんですよ。大変おおきな裾野、大きなきっかけにもなつているので。出来るだけヒアリング・ヴォイシズのこと研究していきたい。理解してもらえるように広げていきたいと思ひます。

中恵 はい。

佐藤 だけどあんまり一生懸命になると、また暇がなくなるんで、そうすると家族を巻き込んで、女房からあなたにつきあつてえらいめにあつたと言われておりますので、やっぱりもうちょっと楽しい時間をね、作りたいと思ひます。ヒアリング・ヴォイシズの国際会議に出ると称して、まあ外に出る。

中恵、吉沢、山本 (笑)

中恵 いいですね、それ。

佐藤 まあそれは冗談で。海外に行くとき、女房と一緒にいったときもありますけど、カ

ンファレンスの間は女房が一人になるので、英語も話せない私をほったらかしにしておいて、とんでもない奴だと、言いました。一度くらいは二人の旅行のためだけに出かけろというふうに要求されている。まことにそのとおりだと。そういう楽しみもしたいなと、思ってます。

中恵 はい。

佐藤 それから命をね、やっぱり授けられた命、頂いた命というのをますます感じて、大事に平和に貢献できる人生でありたいと思ってます。

中恵 ありがとうございます。まあ私今回ですね、このインタビューさせて頂くまえに、皆様にお手紙等お送りしてというなかで、佐藤先生から叱られたりですね。その後日が近づいてきて、先生に研究プランをお渡しして、どうなるんだろうと思ってたときに、夜中に先生からメールがきて、うわっ佐藤先生からメールだって。で、そういうことがあったんです。山本さんからシャーマンのお話の手紙を頂いたり、吉沢さんがお手紙をなくされたっていうお話を聞いて、もうどうなるんだろうどうなるんだろうと。でも、必ずやり遂げるって。今日はインタビューで途中なんですけどきつといいものにして公表していきたいと思ってますので、これから最後までどうぞよろしく願いいたします。ということで。

佐藤 ご苦労様です。ありがとうございます。

山本 ありがとうございます。

中恵 ありがとうございます。

インタビューを終えての若干の覚え書き

中恵 真理子

結びにあたって解説とまではいかないまでも、このインタビューについての私の理解を示しておきたい。

第一部冒頭に、まず、佐藤はヒアリング・ヴォイシズの考え方について、概説している。彼によれば、ヒアリング・ヴォイシズ（聴声）を、精神病の症状と見るのは社会の医療化のなかで構築された歴史的な見方である。声は聞こえているものの支障なく生活している人が現在でも多数存在し、そのような人は医療の対象ではない。声が聞こえて困っている人もいるが、声が聞こえるという体験そのものの意味を重視する探求のあり方があり得、その立場に、ヒアリング・ヴォイシズという考え方がありうること、これらのことを語っている。さらに、ヒアリング・ヴォイシズは体験であると同時に、研究と運動でもあり、たとえば、運動としては、当事者のエンパワーメントに努めていくような形のものである、と話を結んでいる。なお、佐藤はさらに、この運動が起こった背景には、薬で抑えるという医療的対処では結局また声が聞こえてきて解決がつかないという問題、あるいは、「聴声」を病気と捉えられてしまったことによる、二次的な負担が思いの外重いという問題などが、あると語っている。卓見であるように思われた。

ついで、この佐藤の理解・主張と100%重なる訳ではないが、同様に重要な理解が吉沢のコメントから見て取れる。ヒアリング・ヴォイシズ体験者の吉沢は、体験そのものの苦しみは、なくなるものであるならなくなってほしい（ここでは医療と親和的）が、それと同時に、声を内的なものとしては捉えきれない、ともいう。けれども、「外」的な声であっても、それをひっくるめて「私」であると思えるし、思うべきである、と決意を込めて語っている。当事者らしい、重要な話が聞けたように思われた。

第二部は、聴声に対する分析を三人がおのおのの体験をもとに語っている。結果として、聴声は内的なものとしてだけでは捉えられないような質をもつがゆえに、逆に自己にとって大きな意味をもって、迫ってくるというリアリティがある、という。また、声の内容に注目し、その声の語ることを真剣に聴くことで、生の再編成が可能になるだろう、と展望を語っている。つまりは、聴声者文化の可能性が提示されたのだと思われた。このなかで、当事者である吉沢は、自己にとってはよそものと思えない「声」も、自己のもう一つの側面だと決心することで、吉沢はぎりぎり、自己を確保している、すなわち、自己の意志を自分の「生」の中核において生きていくんだと主張しているように思われた。ここに一個人としての矜持が示されている、と読むこともできよう。こうした吉沢的なあり方は、生き難さの語り的一种と捉えるべきではなく、彼の生き方の質を示すものとして捉えるべきであるようにも、思われるのである。

引用・参考文献

- エンシンク, ベルナディーン, 1997, 「声が聞こえる前の体験と声をもたらすもの」『臨床心理学研究』日本臨床心理学会, 35(1)別冊:2-29.
- フィル, トーマス, 2003, 「聴声とその意味: ケーススタディ」『臨床心理学研究』日本臨床心理学会, 41(1):18-23.
- 藤本豊・佐藤和喜雄, 2002, 「ヒアリング・ヴォイイズ」『臨床心理学研究』日本臨床心理学会, 39(4):17-22.
- 藤本豊, 2002, 「人々は幻聴をどうとらえているかー「幻聴」についてのアンケート調査結果からー」『臨床心理学研究』日本臨床心理学会, 40(2):39-47.
- 姜尚中, 2004, 『オリエンタリズムの彼方へ 近代文明批判』岩波書店.
- 森山公夫, 2002, 『統合失調症ー精神分裂病を解く』ちくま書房.
- 宮台真司・鈴木弘輝・堀内進之介, 2007, 『幸福論 <共生>の不可能と不可避について』日本放送出版協会.
- 中村元, 2004, 『伝典のことば 現代に呼びかける知恵』岩波書店.
- ロウム, マリウス&サンドラ, エッシャー, 2000, 「声を聴く人々への支援活動」『臨床心理学研究』日本臨床心理学会, 37(3):32-43.
- ロウム, マリウス, 2001, 「ヒアリング・ヴォイイズと伝統的精神病概念」『臨床心理学研究』日本臨床心理学会, 38(4):80-119.
- ロウム, マリウス, 2003, 「体験中心のアプローチに向かうヒアリング・ヴォイイズ」『臨床心理学研究』日本臨床心理学会, 41(1):2-9.
- Romme, Marius A.J. and Alexandre Escher D.M.A.C., 1989, "Hearing Voices," *Schizophrenia Bulletin*, 15(1). (=1996, 佐藤和喜雄訳「ヒアリング・ヴォイイズーHearing Voices, 声が聴こえるー」『臨床心理学研究』日本臨床心理学会, 31(2):1-17.)
- 佐藤和喜雄, 2003, 「ヒアリング・ヴォイイズの理論と実践を進める要因と阻む要因」『臨床心理学研究』日本臨床心理学会, 41(1):24-35.
- 佐藤和喜雄・岡部浩・額田敦史, 1998, 「ヒアリング・ヴォイイズ」『臨床心理学研究』日本臨床心理学会, 35(4):8-12.
- 佐藤和喜雄・吉澤毅, 2001, 「ヒアリング・ヴォイイズ」『臨床心理学研究』日本臨床心理学会, 38(4):59-71.
- 立川昭二, 2007, 『病気の社会史 文明に探る病因』岩波書店.
- 浦河べてるの家, 2002, 『べてるの家の「非」援助論 そのままでいいと思えるための 25章』医学書院.

Discussion Paper in Social Sciences

NO. 4.

<聴声（ヒアリング・ヴォイシズ）>というアプローチが
紡ぎ出す世界—インタビュー記録と若干の覚え書き—

発行日 2008年5月16日 第一刷発行
2008年6月11日 第二刷発行（誤植訂正版）

著 者 中恵 真理子 (NAKAE, Mariko)
檜田 美雄 (KASHIDA, Yoshio)
吉沢 毅 (YOSHIZAWA, Tsuyoshi)
山本 明子 (YAMAMOTO, Akiko)
佐藤 和喜雄 (SATO, Wakio)

〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地
TEL (088) 656-9308 (檜田研究室)

発 行 徳島大学総合科学部社会科学講座
発行部数 70